



Title	松山先生を憶ひ奉りて
Author(s)	岡井, 慎吾
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 28-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88739
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

に先生の計畫せられたことが、益發展して、懷徳堂が愈盛大になることを切望する次第であります。先生の文學博士になられたと云ふことも、御逝去になつたと同時に聞いたので、其のお祝の辭も差し上げることの出来なかつたのを自分としては心残りとする所であります。（藤塚誠二筆記）

松山先生を憶ひ奉りて

岡 井 慎 吾

私が松山先生の御提擧を受けたは明治三十七年四月から大正五年三月まで廣島高等師範學校に奉職した十一年の間で有る。

三十七年四月に高等師範の學級が揃ひ、附屬中小學校が開かれて、その形が整つた。私は附屬中學校の教員として參つたので、先生は本校國語漢文學部の漢文科主任で有られた。漢文科には松平良郎、三宅少太郎の兩先生も居られたが、此兩先生は舊い御方だから、先生は主として漢文學史漢文法などの方面を受け持たれた。

附屬中學校は普通の中學校の様に文部省の定めたまゝを守るのではなく、特殊の研究をして中等教育

界の參考に供するをも其使命とする。私は中學校の漢文教授此手始めには文法的に説明して、他の英語と結び附けて理會せしめるといふ方法をよしとし、其爲には英語を若干學んでから漢文に入るが得策だと考へて、漢文教授を第二學年から始めるの案を立てた。此は結果に於ては漢文教授時間の減少となる。否時間を減少しても効果は減少せぬ、畢竟能率の増加だといふが此案の生命である。之を擧げて先生に教を乞うた時に、先生の御機嫌が餘り良くなかつたが、竟に有意義の方法として實行せられた。

其後に教科目研究會といふが置かれた。本校の各學部毎に有るので私等は國語漢文科教科目研究會。本校の教授は學者としては尊い人だが、必ずしも卒業生を送り出す所の中等教育の實際に明るい人では無い。高等師範の教授は須らく中等教育の實際にも通すべく、然く導くが此の研究會の目的と有つて、問題の選定も具躰案の考察も皆附屬中學校の教員が當り、此等を通じて本校の教授に中等教育を理會せしめるといふ意氣込である。この會合でも國語と漢文との教科的價值が屢論議せられたが、松山先生が漢文科主任として奮闘せられたは今に私に深い感激を與へる。

何年からだつたか漢文科の三教授の御宅で月一回夜分に學問上の談合をせられる會が成り立ち、私はその席末に陪聽するを許された。松山先生からは東塾讀書記、墨子閒話の御話などを承つた。其時は閒話は希觀の書、何でも先生が狩野博士邊から借りて見えての事で、一座は目を丸くしたと記憶し

て居る。先生は大學に連絡が有つて新著新機運について常に話題を提供せられた。

これが基礎となつて發達したか否やは今確かで無いが廣島漢文學會といふか成立つた。本校の三先生を中心として市内の漢文科教員及び之に趣味を有する者が會員で、本校の上級生にも聽講せしめるといふ仕組。先生はこの會で「儒學に於ける仁の意義の發達」を講せられて

仁の意義は孔夫子に至りて擴大せられて徳の第一位に置くに至り、子思は仁義並び言ひて、人性天賦なるを説き、孟子に至りて仁義並べ説き此二者を人心の骨髓なりとせり

と結ばれたと私の抄録にあります。

大正の初と思ふ、先生は大患に罹られた。その爲か此學會の御講演の回数は多くないやうだ。

先生は柔道で鍛へられた相で岩丈な躰格であられたが丈はお高くない。出校せられるに常にフロックコートを着られる、大分大牢の羹のやうな色では有つたが。私は高等師範の漢文科主任教授だから儀容を正されるものと感服して居つた。一度本校に展覽會めく事が有つて「眼の錯覺」の一例として丈の低い人がフロックコートを、高い人が背廣服を着て居る圖が出されて有るのを、本校の生徒が見ては松山先生と口ごもるを聞いて苦笑した事がある。此う書き立てると先生は何處で苦笑して下さるだらうか。